

(1) . □ □

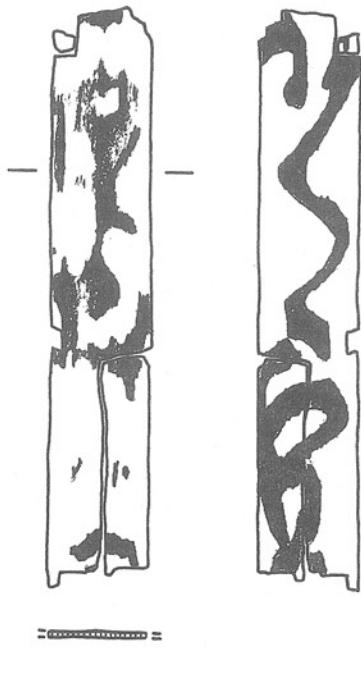
(76) × (13) × 0.5 081 (91?)

厚さ〇・五mmと非常に薄く、両面に墨書きされていることから、單なる削屑ではなく、柿経の一部である可能性がある。両面の墨書きはいずれも判読不能である。

今回の報告にあたり、島根県埋蔵文化財調査センターの平石充氏、調査担当者で現在鳥取県埋蔵文化財センターの北浦弘人氏から「教示を得た。

9 関係文献

津和野町教育委員会「有福寺遺跡発掘調査概要報告書」(一九九四
(宮田健一)



島根・高田遺跡

1 所在地 島根県鹿足郡津和野町大字高峯
2 調査期間 一九九〇年(平2)七月～一九九一年三月
3 発掘機関 津和野町教育委員会

4 調査担当者 北浦弘人

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 繩文時代早期～江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(津和野)

高田遺跡は、津和野町の中心街から南西に直線で約二kmの地点にあたる。休火山雲井峰により形成された扇状地地形上に立地し、津和野城を北東側の山嶺に望む位置にある。津和野城は元来三本松城といい、正中元年(一三二四)に吉見頼直によって築城されたと伝えられる。吉見氏の居館については、現在までのところ所在地不詳であるが、津和野城山の山麓部で、高田

遺跡の北側約1km、津和野川の対岸にあたる喜時雨地区にその候補地が求められている。高田遺跡においては、吉見氏時代の遺構、遺物が検出されており、吉見氏関連の遺跡として注目される。

高田遺跡の現況は、扇状地上の水田及び集落で、圃場整備事業に伴い一九九〇年度より発掘調査が行なわれ、本事例はその第一次調査によるものである。この調査は遺跡南西部の約300m²を対象とし、縄文時代晩期から近世に至る遺構、遺物が検出されている。

木簡出土遺構は、調査区の南東部に位置するJ区内のSX一である。J区から出土した遺物は一六世紀代のものが主体的であり、建物の規模、構造は把握できないが、多数の柱穴が検出されている。これらの柱穴群のほぼ中央部にP五があり、これを中心に約二二m四方の範囲に五つのピット（P一～五・径三五～一四cm）が賽の五の目状に配されている。それぞれのピットからは土師質土器の皿五点と銅錢一点がセットで出土し、皿は大型のもの三点と小型のもの二点の組み合わせを示す。SX一は、これら五つのピットの南北隅のP四と中央のP五のほぼ中間点に位置する。

SX一は、本来埋置されたものと思われるが、土坑状の掘形は検出し得なかつた。一辺30cmの方形の範囲から土師質土器の大型の皿九点、小型の皿二点、銅錢四四点、木簡二点が出土した。大型の皿は上五点、下四点の二段に積まれ、各々賽の目状に置かれている。上段の中央の皿と下段の四点の皿にそれぞれ銅錢と穀物らしき種子

が載せられており、木簡は下段の北側と西側の皿に一点ずつ直交する位置関係で置かれていた。木簡は、いずれも梵字と四縦五横が墨書きされており、斎串と思われる。SX一及びP一～五は、地鎮の屋敷地取作法に基づく遺構と思われ、出土した土師質土器から一六世紀代に比定されるものと思われる。

8 木簡の釈文・内容

(1) 

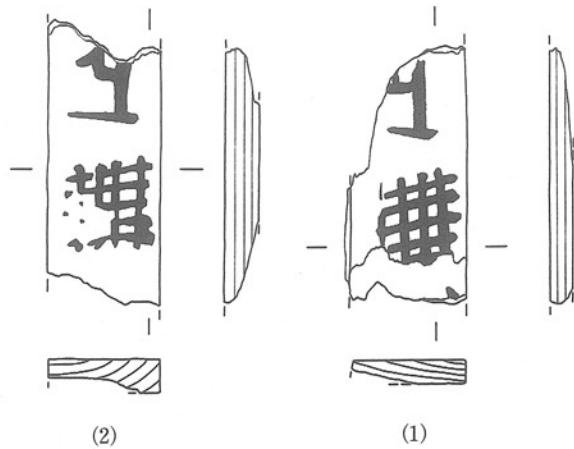
(2) 

(76)×29×6 081
(68)×29×6 081

二点とも、上下両端は折損しているが、左右側面は原形をとどめている。裏面は腐食しており、遺存面に墨痕は認められない。文字は墨跡明瞭であるが、一部剥落している。肉眼では判読可能であるが、念のため赤外線テレビカメラ装置を利用した。いずれも第一字が随求菩薩を表す梵字ハラ (para)、第二字が四縦五横である。(1)のみ微かに第三字らしき墨痕が窺える。

なお、木簡及び木簡出土遺構の解釈については、奈良大学の水野正好氏からご指導いただいた。本報告の執筆にあたつては、津和野町教育委員会宮田健一氏の、また赤外線テレビカメラ装置の使用にあたつては、島根県埋蔵文化財調査センターのご協力を得た。

(北浦弘人 (元津和野町教育委員会・現鳥取県埋蔵文化財センター))



(2)

(1)

(S = 1:2)

岡山・百間川米田遺跡

ひやっけんがわよねだ



(岡山北部)

1	所在地	岡山市米田
2	調査期間	一九九七年度調査 一九九七年（平9）四月一
3	発掘機関	岡山県古代吉備文化財センター
4	調査担当者	中野雅美・物部茂樹・加藤和歲
5	遺跡の種類	護岸施設・橋跡
6	遺跡の年代	縄文時代晚期～中世・近世
7	遺跡及び木簡出土遺構の概要	

百間川米田遺跡は、旭川の放水路として江戸時代に造られた百間川の下流域に位置する。岡山県古代吉備文化財センターでは、建設省から委託を受けて、一九七七年から発掘調査を実施している。

これまでの調査結果から、百間川米田遺跡は、縄文時代晚期から中・近世に至る複合遺跡で、常に臨海性の